

日本の作家 41

岡 保生著

明治文壇の雄  
尾崎紅葉

新 典 社



岡 保生 (おか やすお)

大正12年3月31日，三重県伊勢市生まれ。

昭和20年早稲田大学文学部卒業。

現職 青山学院大学教授。

専攻 日本近代文学。

主要著書 『尾崎紅葉—その基礎的研究』

(昭28，東京堂)『評伝小栗風葉』(昭46，桜

楓社)日本の作家44『薄幸の才媛 樋口一葉』

(昭57，新典社)

現住所 〒168 東京都杉並区宮前4-9-29

明治文壇の雄 尾崎紅葉

日本の作家 41

昭和59年12月10日 初版発行

定価 1,500 円

著 者 岡 保 生

発行者 松 本 輝 茂

発行所 株式会社 新 典 社

東京都千代田区西神田3-5-6 大坂ビル

TEL 東京 (03) 265-3781, 3863

振替口座 東京 7-26932 〒 101

検印廃止，不許複製

壮光舎印刷(株)，(株)萬友社，牧製本印刷(株)

ISBN 4-7879-7041-0 C 0395

日本の作家41

岡 保生

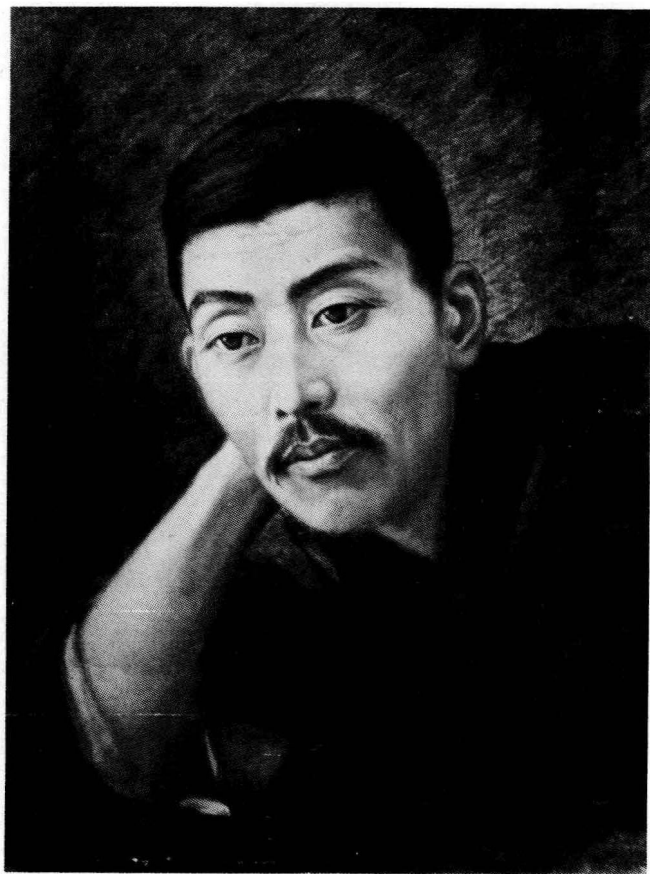
明治文壇の雄

尾崎紅葉

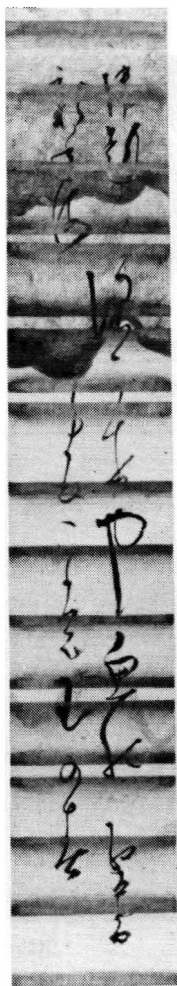
新  
典  
社  
刊

編集委員

秋山虔・有吉保・犬養廉・井上宗雄・岡保生・片桐洋一・片野達郎・  
木俣修・小林茂美・今柴蔵・神保五弥・塚原鉄雄・橋本不美男・藤平春男



尾崎紅葉肖像（横尾英夫氏蔵）



尾崎紅葉短冊（著者蔵）

御題 浪かげや魚の

紅葉

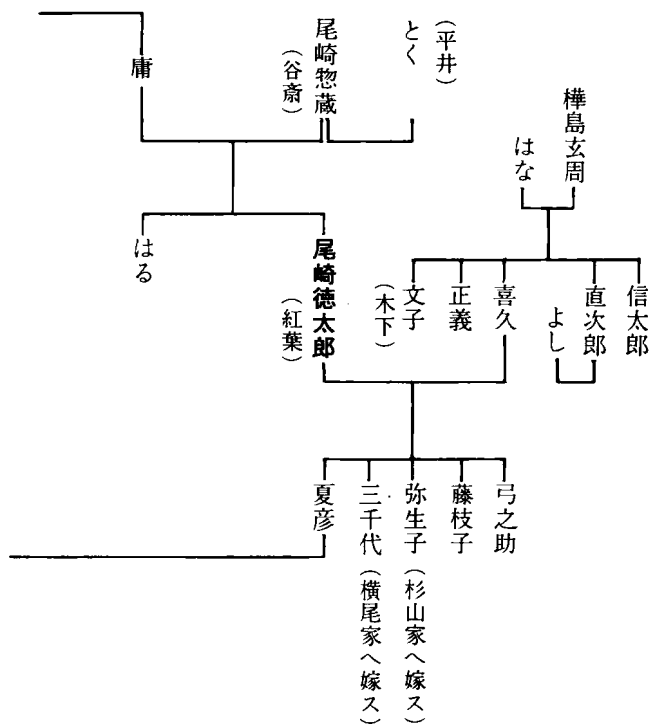
新年海 まなこも玉の春

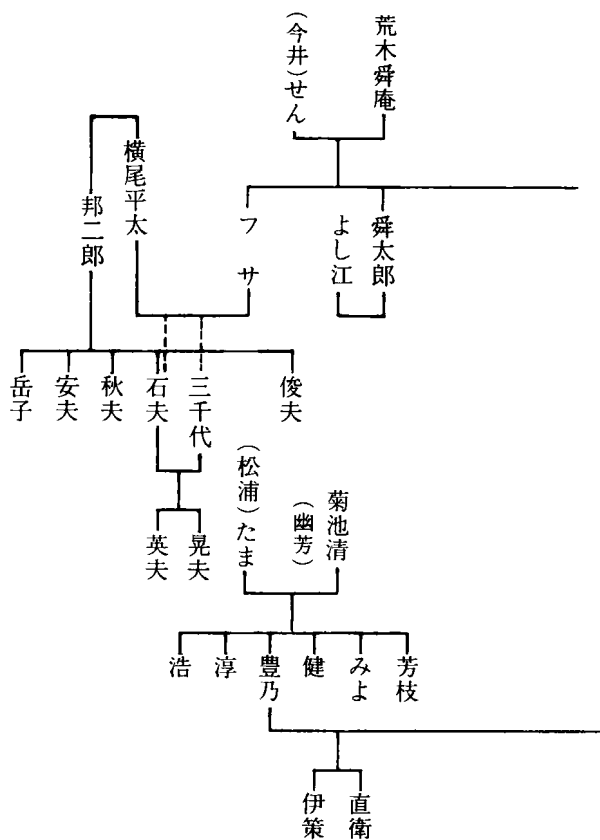
尾崎紅葉（おざき こうよう） 明治期小説家・俳人。本名徳太郎。別号、半可通人、緑山、十千万堂ほか。慶応三年（一八六七）十二月十六日生まれ（太陽暦では一八六八年一月十日）。明治三十六年（一九〇三）十月三十日没。満三十五歳九ヵ月だった。尾崎家は代々伊勢屋という屋号の商家で、江戸芝に居住した。しかし、父惣蔵は廃業して彫刻にその才能を発揮し、角彫りの名人谷齋と世にうたわれた。一方、奇行に富む「赤羽織」の幫間としても有名で、花街や角力場によく出入していたという。母は庸。漢方医の荒木氏の出で、惣蔵に嫁したが、明治五年（一八七三）五月、かぞえ年二十四歳で病没した。その後、母方の祖父母のもとで養育され、小中学を経て東京大学予備門に入学、在学中の明治十八年（一八八五）山田美妙、石橋思案らと硯友社を結成、機関誌『我楽多文庫』を創刊、文学活動の第一歩を踏み出した。明治二十二年（一八八九）『二人比丘尼色懺悔』を刊行、出世作となる。同年末、読売新聞社に入社、以後、同紙のために次々と小説を執筆、いずれも世評高く、彼の住んでいた牛込区横寺町（現、新宿区）にちなんで「横寺町の大家」とうたわれ、また、幸田露伴と文壇の人気を二分して「紅露時代」をきずいた。主な作に「伽羅枕」「二人女房」「三人妻」「心の闇」「多情多恨」「金色夜叉」などがある。なかでも「金色夜叉」は明治三十年（一八九七）以後、彼の没年に至るいわば畢生の大作で、未完に終わったとはいえ、劇化、映画化もされて、明治文壇第一の人氣作となった。俳人としても一家をなし、また泉鏡花、徳田秋声ら幾多の俊秀を門下として養成もした。文章報国を念願しつつ、胃癌のため病没、その死は満天下の読者に愛惜された。

## 目次

|                |     |
|----------------|-----|
| 尾崎紅葉の輪郭        | 五   |
| 尾崎家略系図         | 八   |
| 主要人物解説         | 一〇  |
| 一 紅葉誕生         | 一三  |
| 二 荒木家          | 二六  |
| 三 修学時代         | 三七  |
| 四 硯友社の創立       | 五一  |
| 五 『我楽多文庫』筆写回覧本 | 六五  |
| 六 『我楽多文庫』印刷非売本 | 八二  |
| 七 『我楽多文庫』公売本   | 一〇〇 |
| 八 『二人比丘尼 色懺悔』  | 一二七 |

|    |               |     |
|----|---------------|-----|
| 九  | 読売入社まで……………   | 一三八 |
| 十  | 紅露時代の幕あけ…………… | 一六三 |
| 十一 | 牛込横寺町……………    | 一七八 |
| 十二 | 新聞小説家として…………… | 一九〇 |
| 十三 | 「多情多恨」……………   | 二〇四 |
| 十四 | 文壇の大御所……………   | 二二一 |
| 十五 | 新潟、佐渡……………    | 二三一 |
| 十六 | 「金色夜叉」……………   | 二四一 |
| 十七 | 病勢つゐる……………    | 二五八 |
| 十八 | 終焉……………       | 二七〇 |
|    | 略年譜……………      | 二七九 |
|    | あとがき……………     | 二八五 |





○勝本清一郎「尾崎紅葉血縁図」(「紅葉の血統」所収)をもととし、  
改訂を加えた。

## 主要人物解説

谷倉（こくら）？

明治二十七年（一八九四）紅葉の父。本名尾崎惣蔵。角彫りの名人、また奇行の幫間として知られる。芝に住み、紅葉と別居していたが、彼の学資などを援助した。

荒木舜庵（あらきしゅんあん）

文政二年（一八一六）明治三十八年（一九〇五）近江国（滋賀県）生まれ。旧姓吉川、荒木氏の

養子。漢方医、江戸芝で開業。紅葉の母庸（もよう）の父。紅葉を幼時から養育、後年も紅葉と同居。紅葉の死後、長男の舜太郎方に引き取られ、そこで死去。

尾崎喜久

明治六年（一八七三）昭和二十八年（一九五三）東京芝の生まれ。漢方医樺島玄周の長女。明治

二十四年（一八九一）三月、紅葉に嫁した。二男三女の児女がある。

山田美妙（やまだびみょう）

慶応四年（一八六八）明治四十三年（一九〇〇）東京神田生まれ。父は南部藩士。紅葉とは竹馬

の友。大学予備門入学後、ともに硯友社（けんゆうしゃ）を創立、『我楽多文庫（がらくたぶんこ）』発刊。のち紅葉と別れ、『都の花』主幹。小説家として活躍。国語問題にも功績がある。

石橋思案（いしばしあん）

慶応三年（一八六七）昭和二年（一九三三）横浜生まれ。長崎通詞の家系。東大中退。硯友社同

人。小説家、雑誌記者。紅葉の親友。旧劇などにくわしい。

川上眉山（かわかみびざん）

明治二年（一八六七）明治四十一年（一九〇八）大阪生まれ。幼時上京、東大中退。硯友社同

人。小説家。観念小説で名声を得た。代表作『観音岩（かんのん）』。文学的行きづまりにより自殺。

巖谷小波（いわやこなみ）

明治三年（一八七〇）昭和八年（一九三三）東京生まれ。家は近江水口藩医。父の一六は書家と

して有名。硯友社同人。小説家、童話作家。『日本お伽噺』『世界お伽噺』など児童文学の開拓者。「金色夜叉」の貫一のモデルに擬せられる。

江見水蔭 明治二年（一八六九）～昭和九年（一九三四） 岡山生まれ。硯友社同人。小説家。探検家で相摸好きでも有名。晩年、大衆小説や講演旅行にいそしみ、松山市の旅舎で没した。『自己中心明治文壇史』がある。

広津柳浪 文久元年（一八六一）～昭和三年（一九三〇） 長崎生まれ。医家の出、早く上京、東大医科予科に学ぶ。硯友社同人。小説家。悲慘小説は有名。自然主義時代以後文壇から去った。広津和郎（かずお）の父。

高田半峯 安政七年（一八六〇）～昭和十三年（一九三〇） 江戸生まれ。本名早苗。東大卒。読売新聞主筆として紅葉を入社させ、文学新聞の声価を上げた。早大総長、文部大臣。『半峯昔ばなし』など。

角田竹冷 安政三年（一八五五）～大正八年（一九一九） 駿河国（静岡県）生まれ。本名真平。弁護士。東京市議、代議士。俳人。秋声会を紅葉らと起こし『秋の声』を創刊。

後藤宙外 慶応二年（一八六六）～昭和十三年（一九三〇） 羽後国（秋田県）生まれ。本名寅之助。東京専門学校卒。小説家、評論家。『新小説』を主宰、紅葉と親しく、硯友社諸家の作を多数掲載。晩年郷里に隠棲。

泉鏡花 明治六年（一八七三）～昭和十四年（一九三九） 金沢生まれ。小説家。紅葉の門下生。『義血俠血』などで指導を受け文壇登場。『高野聖』『風流線』『婦系図』など。

小栗風葉 明治八年（一八七五）～大正十五年（一九二六） 愛知県生まれ。小説家。紅葉の門下生。『世話女房』などの指導を受け文壇登場。『亀甲鶴』『青春』など。

徳田秋声 明治四年（一八七二）～昭和十八年（一九四三） 金沢生まれ。小説家。紅葉の門下生。紅葉の推薦により読売入社。『微』『妄想人物』『縮図』など。

柳川春葉 明治十年（一八七七）～大正七年（一九一八） 東京生まれ。小説家。紅葉の門下生。紅葉補筆の

「白すみれ」で文壇に進出。家庭小説で注目を浴びた。「生きぬ仲」など。

伊藤松宇 安政六年（一八五五）～昭和十八年（一九四三） 信濃国（長野県）生まれ。本名半次郎。俳人。

かつて「椎の友社」を結成。紅葉・角田竹冷らと秋声会を起こした。古俳書を集めた「松宇文庫」は有名。

内田魯庵 慶応四年（一八六八）～昭和四年（一九二九） 江戸生まれ。評論家・小説家。外国文学にくわし

く「文学者となる法」などで当代文壇を風刺した。晩年は愛書家、随筆家として有名。

吉岡哲太郎 文久三年（一八六三）～大正四年（一九一五） 東京大学化学科卒、理学士。吉岡書籍店を開業

し、「文庫」、「新著百種」など刊行。のち農商務省勤務から東京女子学園創立者となる。

和田篤太郎 安政四年（一八五七）～明治三十二年（一九一九） 美濃国（岐阜県）生まれ。少時上京、巡査

本の小売行商などに従事。のち出版社春陽堂を経営。紅葉の著作をほとんど出版している。

## 一 紅葉誕生

紅葉尾崎徳太郎は、慶応三年十二月十六日に生まれ、明治三十六年（一九〇三）十月三十日に没した。

紅葉の墓は東京都港区の青山墓地にあるが、その一種ロー〇号一四側にある彼の墓碑「紅葉尾崎徳太郎墓」の側面にも「慶応三年十二月十六日生 明治卅六年十月三十日歿」と二行に記されている。

慶応三年は西暦一八六七年だが、当時は旧暦だったから太陽暦に換算すると、紅葉の誕生は一八六八年一月十日になる。したがって紅葉は満三十五歳九カ月で亡くなったのだ、ということとを力説したのは、勝本清一郎氏であった。それまでは、明治の文学者ならふつうかぞえ年で計算したから、紅葉は三十七歳で没した、という記述が一般的だった。

わずか二年のちがいといえ、人生五十年という考え方がふつうだった明治時代では、三十七歳というと、かれこれ四十歳の不惑に近い感じで、紅葉の「文豪」というイメージにもふさわしいようである。だが、実際は、前記のように三十五歳だったのだから、例の大作「金色夜叉」

を発表しはじめた明治三十年（一八九七）は二十九歳、まだ二十代だった。そういう紅葉の若さというものを、もつと考えねばならない、といったのは柳田泉氏だが、勝本氏の提言は柳田説を裏づけたものとも見られるだろう。

ところで、紅葉の誕生は、彼の没後まもなく公刊された文禄堂の『明治文豪伝之内 尾崎紅葉』（明40・9）以来、慶応三年十二月十六日と、どの書物にも書かれていて問題はないようだった。いま、この『文豪伝』の記述を引くと、

紅葉山人尾崎徳太郎は、慶応三年十二月十六日を以て、芝区中門前町に生る。

とある。従来、紅葉の家系や血統その他をもつとも精密に調査したのは勝本氏で、それらは氏の著作として遺っているが、そのどれを見ても、紅葉の慶応三年十二月十六日誕生という記述だけは同一である。

然るに、東京都公文書館に勤めておられた石川悌二氏は、紅葉の牛込横寺町時代の戸籍を見し、その記載により、紅葉の出生は、慶応三年十二月二十七日である、とされた。この出生の日のほか、戸籍及び他の諸資料による新しい紅葉年譜は、「紅葉の環境」と題する論文とともに、同氏の著『近代作家の基礎的研究』（昭48・3）に収められている。

わたくしは、この戸籍記載の誕生日は一説として処理すべきであり、従来の十二月十六日誕

生でさしつかえなからう、と思っている。実際の誕生日と戸籍のそれとが違っている例は、世間にいくらかもある。ことに明治時代の戸籍では、出生届などのおくれる場合もざらだったであろう。少なくとも、紅葉の墓碑にあのように彫られているという事実は、喜久夫人をはじめ近親者が、彼の慶応三年十二月十六日出生ということを信じていたはずで、それはとりもなおさず、紅葉その人もみずからの誕生日をそう考えていた、ということにほかなるまい。

出生日ひとつを取り上げてみても、こういう具合である。紅葉の伝記には不明な点が多い。この点で、さきにも一言したが、勝本清一郎氏の、紅葉伝記解明のために尽くした功績は大きい。が、そうした氏の努力をもつてしても、なお未解決の箇所があり、それゆえに石川悌二氏の報告もなされたわけだが、新資料の発掘がないかぎり、今日いよいよその伝記の完全な解明は望むべくもない、というのがわたくしの悲観的な推測である。しかしともかく、今日明らかにされたかぎりの伝記的な事実をもとに、紅葉の生いたちを追うこととしよう。

紅葉の父が「赤羽織」の幫間、谷斎（とくさい）であったことはよく知られている。谷斎の本名が尾崎惣蔵であり、彼が明治二十七年（一八九四）二月二十一日没したこともすでに明らかにされた。尾崎家の菩提寺である東京都港区赤坂の一ツ木、円通寺の新叔帳（過去帳）には、

明治廿七年 法寿院麗徳日融信士 二月廿一日 尾崎惣蔵